

釣れ釣れなるままに

2004年思い出の釣行記 PART. 5



☆釣行日	平成16年7月3日(土) 17:00~4日(日) 4:00		
☆入釣場所	雄冬 湯泊岬		
☆天候	晴れ 端風 北西の風やや強い→微風		
☆エサ	カツオ4本 イカゴロ50本 イソメ1箱 撒き餌 イサダブロック1個 ホッケパワー3袋		
☆釣果	シマズイ	375 mm	1
	アブラコ	300 mm	2
	カジカ	350 mm	1
	ガヤ	250 mm	32
	クロゾイ	200 mm	3
	大ダコ		2

休日はやっぱり釣り

2日（金） 娘が帰省（江別でバスケットの試合のため豊沼1泊、岩見沢1泊、）

3日（土） 妻が帯広（息子宅1泊 伊藤さんとホテルに1泊）

町内会の廃品回収（9時）欠席

4日（日） ジャリンコ夏祭り（11時）欠席

3日に起床したときには妻も娘もいない。朝食だけが申し訳なさそうにひっそりと置いてある。当然、釣りに心が動く。徳富川のニジマスはどうだろう？岩尾川のアメマスは？湯泊岬のソイは？行くと決めたら行動は速い。午前中には全ての準備を済ませ出発した。

徳富川の変貌

新十津川北幌加橋の脇道から徳富川に下り立つ。車が2台駐車しており、先行者がいる。橋の下でルアーマンが竿を振っている。今、入ったばかりなのだろう。私が話し掛けようと近づいていくと、すぐに下流に向かっていった。彼の穴場があるのだろう。竿にテグスを結んでいると、上流から年配のフライマンがやって来た。

「上流の大きな落ち込みには魚がいなかった。フライでは全く駄目で、下流でのエサ釣りで40cm台のニジマスが2匹出た。」

まずは上流に向かう。平坦な流れの中から、ニジマスの強いヒキを味わったが魚の顔を見ることは出来なかった。激しい流れの中でもゆっくりと上流に向かう姿からは大物を予感させたのだが・・・。

下流に向かう。大きな溜まりの際にエサを流していると、思いがけなくアタリがあり30cm台のニジマスが出た。久しぶりにニジマスの引きを楽しんだ。下流の溜まりには魚がおらず、魚が着きそうな流れで根掛かりを繰り返したので引きあげる。

徳富川は、以前、漁業組合がニジマスやヤマメの放流を手がけており、川に漁業権を設定して、入渓者から遊漁料を徴収していた川である。現在は養殖事業から撤退しているがその時の居残りが自然繁殖し、時折大物の便りが聞かれる。また、友人からは最上流域で野営しながら、大物イワナを仕留めた話を聞かされてもいた。現在、北幌加地区上流で徳富ダムを建設中であり、今後の河川の変化と渓魚の動向が気になるところである。

湯泊岬の占有権

雄冬に向かう。湯泊岬には人影がない。5時、岬先端に釣り座を構えのんびりと釣りを開始した。暗くなるまでつかの間のゆとりがある。しかし、間もなく3名の釣り人がやって来て湾洞の向かい側に陣取った。そして、私が竿入れをしている湾洞に向かって仕掛けを投げ入れてくる。ちょい投げなら解るが同じ溝を狙って投げってくるのでオマツリが心配である。しかも、私の立つ所に仕掛けが向かってくるので身の危険さえも感じる有り様である。私の方が移動して投げる方向を変える羽目になった。

出岬の左の溝に打ち込んでいた竿からよいアタリが出て、35cm程のカジカがフラシの中に収まった。それを皮切りに湾洞の際への浮き釣りでガヤの猛襲に会う。

ガヤと遊んでいると、出岬の左側に3名の家族連れが入り、続けて、その家族連れと私の間にも3名がやって来て「入っていいですか」と声をかけてくる。

「どうぞ、どうぞ。向かい側に入った釣り人が湾洞に投げ始めたので、私は、この方向に投げています。投げる方向には気をつけるようにお願いします。」

30cm程のアブラコがきた。ビニルバケツに投げ込んでいたチビゾイやガヤと一緒にまとめて入れようとフラシを引き上げると、磯ガニがフラシから次から次へと出てきた。見ると始めに入れておいたガヤの^{はらわた}腑が食いちぎられている。生きているカジカの方は全く無害なのでかまわず入れておくと、また腑を破られるのだろうか。

シマゾイ 自己記録

午前0時、湾処の向かいの釣り人が帰ったので、湾洞中央の溝の沖に向かって遠投する。すぐにガツン、ガツンと大きなアタリが出てシマゾイ37.5cmがあがった。上顎がちりとハリ掛かりしているので、生きているカジカとソイだけをフラシに改めて入れ直し、他の魚はバツカンに無造作に放り込む。

タコとの格闘

湾洞中央に投げ込んでいた竿がゆっくりと移動する。タコだ！ここではタコがよく掛かるのであらかじめ岩棚に置いていたギャフを手を持つ。釣具店で先日購入したばかりの長さ1尺ほどの携帯用のものだが、こんなに早く使用する機会が訪れようとは考えだにできなかった。タコを手元まで引き寄せ一段低い岩棚に下り、ギャフを掛けようとするがもう一步の所で鉤が届かない。ここは無理をせず、隣の釣り人に声を掛けて助けを求める。竿を持ってもらい、岩壁に近づけてもらおうと鉤がすぐに掛かり無事引き上げることが出来た。タコ足1本を進呈する。

しばらくすると、また、タコである。これは湾洞沖に遠投していたもので、はじめは根掛かりと思わせたがゆっくりと竿を平行に引くとずるっと抜けてきた。遠投していた分寄せるまでに随分と時間が掛かった。さらに右の竿を交わすのに手間取った。今度は自分で取り込みをと思うが、ギャフを近くに置いていなかったため、また、先程の御仁に手を借りる。竿を渡し、自分はギャフを取りに岩棚を駆け登る。タコを掛けて岩棚に登る途中で、ギャフがタコの重みのため継ぎ目部分がすっぽ抜ける。手伝っていただいた御仁から竿を受け取り、タコをはずそうと仕掛けを見ると、自分の仕掛けに他の仕掛けが絡みついており、自分の仕掛けはすぐに外れた。タコに掛かっていたのは自分の仕掛けではない見慣れないものだ。湾洞を挟んでいた向かいの釣り人が取り逃したものだろう。手伝いをいただいた彼には先程と同じように2本目のタコ足を進呈する。バツカンがタコで溢れかえった。バツカンに入れていた魚は再びフラシに戻ることになる。

釣り大会なら

夜が明けてきて、隣に入った3名の団体は帰った。辺りを見渡すと私の他には誰もいない。明るくなってからもアブラコが出て、5時まで粘ったが魚は来なかった。6時には片づけ始めた。

帰りの道のりが大変であった。竿バックは後にして荷物を2回に分けて運ぶことになる。最後の防潮堤にあげるときには、リュックからバツカンを取り出した。そして、足下に土台となる大きな石を運んでそれを踏み台にしてバツカンをやっとの思いで防潮堤の上へ上げることができた。

日和岬に立ち寄ろうと旧道を進むと途中に金網のフェンスが道路幅一杯に広がっていた。空身ではフェンスの横を海側に体を乗り出していけなくもないが、荷物と一緒にとなると到底無理である。日和岬でたくさんの人が竿を出していたが複数で入ったのだろうか。裏側に回ってみると同じように柵がしてある。

潮の岬では恵庭寿釣り会のメンバーが3名いた。大型台風8号が太平洋側を通過すると予報されていたためにエリモ方面での大会を変更してこの界限になったということである。この時期、釣り大会で雄冬方面となると厳しいものがあるだろう。今日の私の釣果だどこのぐらいにランクされるのだろうか。ソイ375mm+カジカ350mm+3000g（アブラコ2、アカハラ1）で1000点を少し超えたところだろうか。この時期でこの釣果なら十分と考える。ちなみに恵庭寿釣り会のメンバーの釣果は芳しくなかった。前回の湯泊岬の釣果（アブラコ460mm+ホッケ440mm+5000g：カジカ420mm以下3）、なら確実に優勝だっただろう。

魚の処分

タコはその日の内に捌いて刺身にして晩酌の肴になった。コリコリとして甘味があり旨い。塩もみ加減がよかったのだろう。ソイの頭とカジカはアラ汁にした。具を何も入れていないがさっぱりとしてこれもまた旨い。チビガヤは煮魚用に捌いて冷凍庫に入れ、シマゾイと2本のタコ足は女房が帰ってからの刺身用にと冷蔵しておく。アブラコとニジマスはヒラキにして干してみる。魚はどんなものでもヒラキにするとひと味違ってくる。

次の日、残ったタコを職場に持って行くと、早速、腕に自慢のある職員が調理してくれた。タコは学校の家庭科室に置いてある大釜で茹であげた。コンロも大型のものを使った。大量のガヤは煮魚にして、昼食のおかずとして出してくれた。タコのゆで加減がとてもよくふんわりと仕上がっていた。

